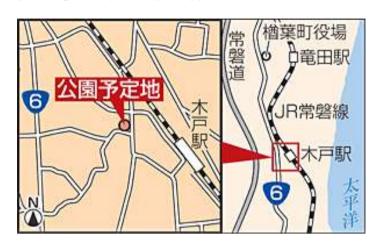
楢葉・木戸駅近くに『結ぶ』公園造ろう! 新たな『絆』原動力

2018年03月22日08時45分



東京電力福島第1原発事故による避難指示解除から2年6カ月が過ぎた楢葉町で、JR木戸駅近くの民有地に民間の力を合わせて公園を造ろうとする試みが動きだした。町内に移住した女性が開店したスナック・小料理屋で生まれた交流がきっかけとなり、帰還した町民と移住者、仕事で滞在する作業員、外部の協力者らの思いが重なり合った。「子どもからお年寄りまでの笑顔があふれる場所にしたい」。新たな絆で結ばれた関係者の願いは一つだ。

21日午前、再整備工事が進む J ヴィレッジから北側に300メートルのスナック・小料理屋「結(ゆい)のはじまり」。「庭石ならあるし、芝の種は友達にもらえるな」「パワーショベルは借りられるよ」「お花を植えると、女性は盛り上がりますね」。公園設立準備委員会の会合に10人が集まり、思い描く公園の姿を話し合った。

メンバーの一人で、町内に移り住んだ千葉県出身の古谷かおりさん(33)は昨年9月、空き店舗を活用してこの店を構えた。都内で設計の仕事をしていたが、被災地の復興に心を寄せて本県を訪ねるうちに、復興事業に携わる作業員が地域に溶け込めず、住民と交流できる場がないことに気

付いた。「人と人との結び付きが生まれてほしい」。店名にこんな思いを込めた。周辺に夜間の営業を再開した店が乏しい中、町内外から人々が集い、常連客もできた。

「震災後、家が解体され、空き地が目立つようになってしまった。公園でもあればいいのだが」。 木戸駅近くで暮らす遠藤庄一郎さん(64)が昨秋、古谷さんにふと漏らした言葉から公園造りの 構想が持ち上がった。

設計や建築に詳しい古谷さんの知人や、NPO法人福島住まい・まちづくりネットワーク(郡山市)、被災地支援に取り組む東北大大学院の教授、学生らを巻き込んで1月末に準備委を発足、計画が始動した。

準備を進める中でうれしい驚きもあった。店に通う作業員が計画の話を聞いて「手伝えないか」と申し出たのだという。古谷さんは「地元の人たちの理解を得ながら少しずつ交流の輪を広げたい」と笑顔で語る。

用地は遠藤さんが所有する県道沿いの空き地を使う。ベンチや花壇を設け、竹の生け垣で囲う。 行政の補助金にはできる限り頼らず、みんなで汗を流そう。そして、住民やボランティアが公園に 集まり、花見や盆踊り、バーベキューなどをできないか―。心躍るアイデアが次々と膨らんだ。

準備委は4月に生け垣用の竹を伐採し、6月ごろに一般参加者を交えた体験型講座と花壇づくりを予定する。2~3年かけて徐々に公園を仕上げるつもりだ。

遠藤さんは公園の未来に思いを巡らせる。「地域の誰もが気軽に集まり、子どもたちには遊んでほしい。この地域には、そういう場所が必要だ」